

開高健の短編三作に関する一考察

—「兵士の報酬」, 「フロリダに帰る」, 「岸辺の祭り」—

稲村 聡*

はじめに

1964年11月から1965年2月まで、開高健は初のベトナム戦争の取材を行った⁽¹⁾。その後、1968年に二度目、1973年に三度目かつ最後のベトナム取材をした。一度目の取材後、1965年にはルポルタージュ『ベトナム戦記』、1968年に小説『輝ける闇』を発表した⁽²⁾。二度目の取材後、1972年には『夏の闇』、三度目の取材後の1973年、二度目の取材の内容も含むルポルタージュ『サイゴンの十字架』を発表したことはよく知られている。

1965年の帰国から最後の取材となる1973年まで、「ベトナムに平和を！市民連合」（以下ベ平連）での活動、衆議院委員会での発言、さまざまな評論をとおして、自身の見聞、そして体験を元にしたベトナム戦争にたいする考えを述べた。小説として評価を得ているのは、『輝ける闇』『夏の闇』、そして1990年に発表された『花終る闇』の、いわゆる「闇三部作」のうち、『輝ける闇』『夏の闇』の二作であろう。

二作についてはさまざまな批評家、研究者によって言及されている。中東、ビアフラでの戦争をふくむが、戦争取材にもとづいた本格的な

小説としては、短編集『歩く影たち』が発表される1978年まで待たなければならなかった、ともいえる。

だが、代表作を発表する前である1965年から1967年までにも、開高はいくつかの短編を雑誌で発表している。書誌については後述するが、これらの短編を、『輝ける闇』の発表後ではあるものの、1969年に『七つの短い小説』として発表している。

本稿では、この『七つの短い小説』収録の短編のうち、作者である開高のベトナム戦争取材の影響がつよい「兵士の報酬」、「フロリダに帰る」、「岸辺の祭り」の三作を検討する⁽³⁾。

開高が従軍取材の際に行動をともにした米軍事顧問団の兵士たち、南ベトナム政府軍、および解放戦線の兵士たちの記述をみていく。

また、日本から取材におとずれている三作の主人公たち、「私」および「久瀬」は、ベトナム戦争を取材していることもあり、特派員としてベトナムを取材した開高の経験が反映されている、といえる。戦場を現場で目撃した直後および帰国後の心理をみていくことによって、代表作を執筆する前段階に、開高がベトナム戦争の取材にどのように影響されたかを考察する。

*早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程6年（指導教員 内藤 明）

なお、米兵、政府軍および解放戦線、そして主人公たちの記述を検討するため、論述にあたっては、作品、時系列が前後する場合がある。

三作品の概要

考察に入る前に、三作品の初出年および概要を記す。なお、「兵士の報酬」および「フロリダに帰る」には、作者の開高がベトナムで経験した南ベトナム解放民族戦線（以下解放戦線）の襲撃のエピソードが背景としてある。簡単にふれておくと、開高は1965年2月14日、旧南ベトナムにおいて、南ベトナム政府軍および米国軍事顧問団による解放戦線の掃討作戦に従軍取材をしている。14日の現地時間正午すぎ、解放戦線の襲撃を受け、掃討作戦に向かった200名のうち、生還できたのは17名、開高はそのうちのひとりであった。

本稿では取り扱わないが、この体験は本稿の「はじめに」で述べた、本作以外の代表作を含む作品にも描かれることになる。

「兵士の報酬」

初出は1965年の『新潮』第62巻7号である。小説家でもある「私」が、ベトナムに取材中の数日間を描いている。南ベトナム政府軍と米国軍事顧問団による解放戦線の掃討作戦を取材し、サイゴン（現ホーチミン市）に帰還した翌日から物語は始まっている。そのとき、野営地でともに暮らしたウェストモアランド米軍曹長が三日間の休暇をもらい、「私」とサイゴン市内で会食をする。掃討作戦中に「私」が思考したこと、ものの回想が描かれ、ウェストモアランドが休暇を消化せずに戦場へもどっていく物語である。

「フロリダに帰る」

初出は1966年の『文藝』第5巻1号である。朝日新聞社から派遣されベトナム戦争を取材した「私」の、帰国後を描いている。主人公の「私」は、かつて洋酒販売会社での勤務経験があり、そこでの同僚は坂根進、柳原良平である。また、釣り好きであることから、作者の開高とかなり似た経歴をもつ。ある日、新聞社から電話が入る。ベトナム取材時に知り合った通信兵であるジェレミー・ボウヤアが戦傷ではなく肝臓の疾患で日本国内の軍病院に入院している。彼はこ故郷のフロリダに帰国する前に「私」に会いたがっているという。ボウヤアと「私」との面会前、その後によみがえってきた、「私」が戦場で見た“死”の記憶が語られる。

「岸辺の祭り」

初出は1967年の『文學界』第21巻9号である。山陽地方の新聞社の記者である「久瀬」の、ベトナム取材中を描く。サイゴンで出会った田中という、九州出身の自動車修理工の少年と、ベトナム戦争の最前線に行こうとする。そこでは政府軍の遺体、解放戦線の遺体をたびたび眼にする。田中少年の成長と、「久瀬」の死にたいする苦悶、政府軍将校による戦争観で物語は閉じられる。なお作品の題名にある「岸辺の祭り」とは、旧正月の休戦状態に川をはさんで行われた正月を祝う祭りのことである。

1：戦争の当事者たち

——米兵、南、北——

はじめに各作品のなかで、米兵や政府軍兵、解放戦線がどのように記述されるかをみていく。概要のところではふれたように、「兵士の報酬」

では、「私」が掃討作戦とともに従軍したひとりの米軍曹長ウェストモアランドが休暇のために帰還したサイゴンで、掃討作戦取材後におちあう。掃討作戦中の回想において、「私」はウェストモアランドの勇敢さを思い出す。ウェストモアランドは、「胸に至近弾を浴びてたおれているヴェトナム人の将校に肘で這いよって、サイゴンのPXでおれの名でフレンチ・コニャックを買い、ひとくち飲んでからヘリコで送ってくれと訣別の辞を優しい熟練の口調でささやいてから、枯葉の上をふたたび肘で去っていった」[開高 1965-a:82-83] という。

たおれた政府軍将校に声をかける曹長は、将校がこれ以上生きられるとは考えてはいない。サイゴンで購入されたコニャックは一口だけ、将校にふくまれ、それが前線に送られるのだ。それ以上将校が飲むことはない。一口飲むことができるかどうか、それが叶ったとしても前線へ送れと指示することもできるかもわからない。

このような個人的な、しかし現場にいたものにとっては忘れられぬ記憶は、「私」が「語りおとしてしまった」ものだという。このほかにも戦場で見たものとして、「葦の沼地の泥水にとびこむ一瞬の眼に映った亜熱帯の黄昏の美しさ、戦闘直後に鳴きかわす名も知れぬ鳥類のざわめき、頭上をかすめる銃弾のしぶきの鉄兜のかげで見た賢いアリたちの営為」[開高 1965-a: 82] などを列挙している。「私」が書き忘れたことでもあろうが、東京では、戦争そのものの動向が重視され、戦場の後方ではあまり重要視されないだろう。これらの印象的な断片を、「私」に語らせている。

ウェストモアランドは、戦闘時以外のときも

勇敢であったという。「上官のまえでも仲間のまえでも、平気で、この戦争は結局のところヴェトコンの勝だといひ放った。－中略－上官や仲間は黙って彼の説を聞いていた。国家権力^{ジャガーノート}の戦車が行進してきたときに私は彼ほどの自由さと果敢さで『否』といえる気力があるだろうか。」「開高 1965-a:90」と、自身とウェストモアランドを比較する。そんな中、3年間の兵役が残っているウェストモアランドは、暇を早々に切り上げ、戦地に戻るという。それを聞いた「私」は、

曹長が消えて十分たってから、とつぜん私は目を瞠った。とつぜん感じた。小石にさわったように確実な予感が私を鞭うった。私は愚鈍を恥じた。そうだ。あのこわばりとおびえに気がつくべきであった。そうなのだ。

(……人を殺したがっていたのだ！)

私はたちあがった。[開高 1965-a:95]

三日間の休暇をもらったウェストモアランドは、サイゴンに友人もおらず、親しくしている女性もおらず、金持と貧乏人しかいない、「大きい」[開高 1965-a:94] な町で過ごすのに我慢ならなかった。このために友人がおり、戦友がいるところで、しかも自分の義務、仕事である戦争、戦闘、人殺しを待望しているだけ、読むことはできるだろう。

しかし、いうまでもないことだが、ベトナムでは戦争中であった。アメリカ兵なら解放戦線の兵士に標的にされ、殺される可能性がたかい。むろんそれは、「最前線」であろうが、街中でテロの標的になろうが変わらない。「私」は、解放戦線は韓国人、フィリピン人、日本人の区別はつかないから、自分も標的になるかもしれない。「おれたちも君たちとっしょに殺され

る」[開高 1965-a: 84] といっている。戦場には敵がおり、サイゴンではテロがある。プラスチック爆弾が炸裂するかもしれないのだ。「おれたち」日本人は、「君たち」アメリカ兵といっしょで、狙われ、殺される可能性があるということになる。

しかし、殺したがっているとは、殺される可能性の一番高い場、つまり戦場にゆく、ということにもなる。そこは軍人の彼が、生きることを実感として感じるができる場なのだ。これがおそらく、サイゴンが「大きらい」なウェストモアランドにとっての戦場、なのだ。それがまた、自らが戦争に参加する理由でもあり、目的には賛同できない戦争によって、逆に自らが生きる理由にもなる、ということになる。

以上のように、従軍の際に同行し、ともに暮らした人びととして、ひとりのアメリカ兵の休暇の様子を描きながら、アメリカ兵の立場を鮮明に語らせている。

2007年に行われた、ベ平連のメンバーであった吉川勇一へのインタビューにおいて、聞き手であった天野恵一は、「開高さんの小説を読んでいて特徴的なのは、アメリカの侵略には当然批判的なわけですけど、動員されてこんな地獄の戦場にいるアメリカ兵にも同情的なんですね。彼は一緒に動いているわけですから」[吉川 2007: 47] という。サイゴンに帰還したあとでも、むろん戦場においても、「死」と隣り合わせの状態にあるアメリカ兵への思いが述べられている。

それでは、アメリカ兵とともに戦う南ベトナム政府軍、また彼らの「敵」である解放戦線に関してはどうのように記されているのだろうか。つぎに、戦場から日本へ帰国した「私」の回想

である「フロリダに帰る」での、解放戦線の少年兵たちの記述をみていく。

「私」のもとに朝日新聞の記者から電話が入る。それは米軍通信兵ジェレミー・ボウヤアが「私」に会いたがっているという旨の連絡を受け、電話を切ったあと、

長い数字を手もとの本のうらに書きつけおわると、若い声は消えた。受話器をおくと、深い息が洩れた。その一瞬に何かが変貌した。逡巡の影なく私は変った。[開高 1966: 62]

という。一瞬にして、日常から戦場、8ヶ月前とはいえつい最近の戦場の記憶、光景に引き戻されるのだった。

しかしその記憶とは、ボウヤアとの記憶ではなく、解放戦線の少年たちのものだった。

どの少年の体にも七発から十発の小さな穴がいていた。頭から脛までの全身に穴は散らばっている。—中略—いくつもいくつもの死体が運河の対岸の鉄条網にまさに手をかけんばかりにしてかさなっているのは、彼らがさいごのさいごまで勝利を信じていたということだった。指の爪のすみずみまで数百億の細胞を“革命的楽観主義”の情熱で浸し、彼らは誤った情報を正しく信じこんで全身をさらけだしたままなだれこもうとしたのだった。何者が裏切ったのであろうか？……[開高 1966: 63]

「革命的楽観主義」という「情熱」で少年は行動し、そして何者かが漏らした情報のために裏切られ、殺されたのだった。「私」は死者によって何が起こったかを教えられた、という。それはまた、「革命的」かつ「楽観的」な情熱、思想によって突き動かされた少年たちであっても、結果として死にいたることであり、彼らの死そのものを教えられたのでもある。

先掲の吉川勇一へのインタビューにおいて天野恵一は、開高には解放戦線へのシンパシーが始めからない、とする。それは開高が、「ベトナム「解放」後が大変なことになる」[吉川 2007: 47] と思っていたからだ、としている。

開高は解放戦線、北ベトナムの取材を直接行うことがなかった。開高は、政府軍や米軍のように個人的に親しくできたわけではない。また、少年たちは個人が特定され、どのような経緯で死なねばならなかったかを知ることもない。捕虜となれば、身元を政府軍、米軍に尋ねればよいだろうが、ここでは遺体の記憶となっている。南、米軍という限られた対象を取材するしかなかった開高にとって、「あちら側」の思想を理解することもまた、困難であったかもしれない。

ただ、ここで少年たちの死そのものに向けられる「私」の眼は、少年たちの詳細な思想、物語を想像させることにもなる。また、一人一人の経歴等、詳細な描写を避けることで、かえって死の陰惨さを語らせることに成功している、ともいえよう。いずれにせよ、開高が「私」に語らせるのは、死そのものなのである。よって天野の指摘は、思想的に解放戦線のシンパシーがない、と限定して考える必要があるだろう。開高は、思想や情熱があったとしても、横たえられた遺体そのものが忘れられぬものであったと「私」に語らせたといえるのではないだろうか。

では、政府軍にとって、「死」はどう受け止められたのだろうか。ふたたびベトナムの戦場を舞台とする「岸辺の祭り」をみていく。作品のはじめに、政府軍の兵が殺害され、彼らの遺体を主人公の「久瀬」と田中少年が眼にする。作品終盤において、その報復として、政府軍の

兵が解放戦線の兵を殺害する。それを目撃した「久瀬」は、「何のためだ。何のためだ？」[開高 1967: 48] と、政府軍の将校に声をかける。しかし将校は、「何でもないよ」「VCのやること、おれたちやるよ」[開高 1967: 48] と答える。「久瀬」は「……」[開高 1967: 48] と、言葉もなかった。

「久瀬」には10代半ばか、あるいはもっと若くしか見えない解放戦線の少年が殺され、遺体は船で川に流される。流されていくさまを目撃したのがきっかけで、政府軍将校にこう聞くのだが、将校にとっては、その前にも解放戦線の攻撃によって政府軍兵士に死者が出ていることから、同じことをするまでだ、としか言わない。「久瀬」によると将校は「淡褐色の静かな瞳には異様な力がみなぎっていた。冷たい、濡れたような視線」[開高 1967: 48] で、「熟練家の強力な気配がたちこめていた」[開高 1967: 48] という。

これを聞いて「久瀬」は黙るしかなかった。一連の出来事は、将校にとっては殺されるから殺すのだが、「久瀬」にとっては人びとが殺されることそのもの、そののみを眼にすることしかできない。「久瀬」はいきなり頬をひっぱたかれたような気がし、そのことに「久瀬」はたちすくむ。「またしても何かがとどめようなく墜ちた。」[開高 1967: 48] という。やられたらやり返す、という、戦時においては当然ともいえる論理を目の当たりにして、「久瀬」は去っていくしかなかった。死者を通して「久瀬」は、アメリカ兵も、解放戦線の少年達たちも、政府軍も、それぞれ理由があり戦争に参加していることに気づかされたのだった。

2：非当事者としての「私」

では、米兵、政府軍および解放戦線戦の少年たち、少年たちをとおして「あちら側」を見た「私」自身は、掃討作戦の体験後どうなったのであろうか。「兵士の報酬」では宿泊先に帰ったあと、「私」は、自身の顔を鏡越しに見る。

ヒゲを剃っても眼の鋭さは消えなかった。醜悪なまでに太った贅肉のだぶつきのなかで眼だけはつきつめるようにキラキラ輝いているので、かろうじて満足することとした。ほかに誇ってよいものは何もない。[開高 1965: 82]

「私」の身体は、それまでの東京における日常生活のなかで、醜いと自嘲するまでに、不必要なほど肥えてしまっている。経済成長を遂げつつある日本に生きる彼は、必要のない「贅肉」を身につけてしまった。しかし、何よりもベトナムでの経験によって、自身の身体の一部である眼だけは鋭くかがやきをうしなっていない。

掃討作戦取材から帰還し「鋭い眼」を手にした「私」の書いた記事は東京へ送られ、時間をかけて、新聞に掲載される。しかし、「まなざしのごとくすばやくうつろな、飽きっぽい日本人は、もう戦場報告に食傷していることだろうと思う。最前線に住みついて生死を賭けたのは私だけではないのだ」[開高 1965: 82] という。

開高によると、この作品が執筆された時点での日本は、ベトナムブーム下にあったという。1973年に開高は「頁の背後」においてその状況を「まるで誰も彼もがあ国のことをまるで自分の掌の筋でも読むように、自分の家の家計簿でも読むような口調で書いたり、喋ったりしているという事実であった」[開高 1974: 271] と、その印象を述べている。

そのような状況にある東京では、どれだけ「私」が戦場での体験を力説しようと、ありふれたニュースのひとつとしてうけとめられるのみである、ということだ。しかしここで、彼と同じような経験をしたのは彼だけではない、同じように取材する記者は多くいたのだった。

このように「私」は、鋭い眼をしつつ、ベトナムブーム化にある東京への批判的な視点を持っている。しかし、多くのベトナム取材記者たちの取材記事のなかで、自身が生死を賭け書いた記事も埋もれてしまう、ともいう。掃討作戦の取材から帰った二日目になると、自身の顔をのぞきこんでも、その印象は変化してしまう。

ふくれた唇。黄ばんだ眼。むくんだ臉。白い苔の生えた舌。一夜ですべてが消えた。鉄兜の形どおりに額に白い線が入っているのは変わらないが、昨日の黄昏に私を魅したものが手のつけようなく消えてしまっていた。亜熱帯の午前十一時の日光のなかには中年にさしかかった新聞記者、薄穢く脂じみた、無節操でシニクで臆病な新聞記者が宿酔でくらくらしながらたっていた。戦闘のことを語る資格は、もう、私にはないようだ。茫漠とした、つめたい、魚のような目が瞪られて東京の顔を眺めていた。[開高 1965: 86]

掃討作戦の翌日は、眼のかがやきだけで「満足することにした」が、つかの間の充足は、ほんの24時間で消えた。彼が戦場で経験したものの、経験したと感じたものは消えつつあり、視覚的に確認できる日焼けのあとだけになってしまったのだった。残ったのは東京で身につけた「贅肉」であり、戦場での経験を語る資格すらない、と感じている。非戦闘員ではなく、現地で戦争に直接関係しない、見ることしかできない第三者としての「私」は、自身の仕事である語る、描く資格すらないというのだ。

そして、「私」は自身が戦取材に来たことそのものについて自問自答する。他の作品でも述べられた、ベトナム戦争を取材している自身への後悔がつつられる。

何のために私は死なねばならないのか。ヴェトナム人でもアメリカ人でもない私が何故こんな赤土地帯のジャングルのほとりで死を待機しているのか。—中略—“アジアの戦争の実態を見とどけたい”というのは東京やサイゴンでの傲語であった。私はランボォでもなく、ロレンスでもない。私の臆病さをおごそかな口調でのしる東京の臆病者たちとおなじだ。その一人にすぎぬ。—中略—私がここにきたのは純粋に個人的な動機によるものだった。明確にそうだった。私にはハッキリわかっていて。ただ私には何故そうなのかがわからなかったのだ。まったくわからなかったのだ。[開高 1965: 92]

現場の取材経験があったとしても、ベトナムにい続けなければならない人びととの違いをあらためて実感する。「私」にとって、「個人的な動機」は戦取材の目的にはならないのだった。だからこそ何のために来たのか、と執拗に自問する。

「兵士の報酬」で、ウェストモアランドは「私」を日本のアーニー・パイルと呼ぶ。実在のジャーナリストであったアーニー・パイル (Ernest Taylor Pyle) は1945年に沖縄で戦死している。「私」は幸いなことに、戦死することなくサイゴンに戻ってきた。しかし、ウェストモアランドは、少なくとも兵役の間は生死を賭け続けなければならない。先述したように「私」は、「もう日本人も安心していられない」[開高 1965: 84]という。民間人、記者、そして北か南を問わず、流弾が飛び、銃撃される状況では、自身の所属すら問われず、殺されるかもしれないの

である。そして、幸運ならば、生死を賭けた結果として生き残ることができる。しかし「私」は、「ヴェトナム人でもアメリカ人でも」なく、死を待機しているという認識しかできないのだ。

「私」と、ウェストモアランドとの経験の違い、彼と政府軍兵士との違い、現地のベトナムの人びととの違いは、戦場から抜け出せるか否かであろう。離脱できることに気づかされ、そのことを絶対的な相違として受け止めてしまったがゆえの、語り難さ、説明のしづらさへの苦悶がつつられている。

3：戦場から離れて

前章では「兵士の報酬」の主人公「私」が、ベトナム現地において自身の戦取材の動機について考え、その回答を自ら導き出すことができなかつたことに触れた。

では、戦場を離れ、いったん日本に帰国し東京へ帰ると、戦場を体験した者にはどのような変化があらわれたのだろうか。

「フロリダに帰る」において、「私」が東京の自宅で解放戦線の少年たちの死の記憶を辿っていたことは先述したが、ボウヤアとの面会を終えたあと、従軍した戦友たちについての記憶をよみがえらせようとする。しかし病院は戦場にあるのではなく、日本国内にある。病院は、「あまりに清潔で、あまりに明るかった。壁、敷布、体温計、彼らは視線の撫でる物ごとごとくを浄化してしま」[開高 1966: 69] うような場所であった。

「私」には病院で面会した米兵のボウヤアすら、兵士であつたようには思えなくなる。彼は「優しく、きまじめで、当惑した大学生のようにも見え、休息しているセールス・マンのよ

うにも見えた。汗と日光にあえぎつつ運河の岸をあてどなく大股に歩いてゆくアメリカ兵ではまったくな」[開高 1966:68] くなるのだ。

むろん「私」には米兵と面会しているという意識はあるため、戦場の「死」について考えてみようとする。ボウヤアと会う前に思い出していた、「穴だらけの小さな死体」を考えるのだが、戦場とは対照的な場である日本の病院では「ことごとくを浄化」してしまう。

そのような病院にいながら、なぜ「私」は戦場の記憶について考えるかという、「私はおびたいのだ。泥にまみれて濃くなりしたいのだ。腐った緑いろの肉に鼻を近ぢかよせてネズミのようにふるえていたい。」[開高 1966:69] からだという。だが、ベトナムを離れてわずか8ヶ月であるにもかかわらず、清潔で明るい、戦場とはあまりに対照的な病院では、それすら叶わなかった。これは、ともに行動したのものとしての米兵への共感であるのか、または日常生活のなかで忘れられつつある、自らの体験の重みをとりのどしたいのか、あるいはそのどちらかでもあるのだろうか。

戦場における死そのものを見る眼は、ともに従軍したボウヤアにも向けられる。

晴朗で謙虚で優しい戦友を眼はなるだけ残酷、下劣、無残な手段で破砕することにふけていた。ぐしゃぐしゃに腹を裂かれた彼が泥と尿と糞のなかで悶えつつ、“Oh……Oh……Oh!……”と眼をまじまじ瞪りながらつぶやいている光景を眼は見ただがっていた。—中略—私はやわらぎ、微笑し、ひめやかに深くボウヤアをくつつろがせていた。眼はこわばり、焦燥し、しぶとくボウヤアを殺したがつっていた。[開高 1966:71-72]

従軍の際ともに暮らしたボウヤアが残酷、下

劣、無残な手段で殺されることを、「私」の眼は見たがり、望んでいるというのだ。ベトナムではなく日本で出会っているとはいえ、戦友にたいする記述としては陰惨ともいえる語りであるが、そのような眼に「私」は、自分自身に愕然とする。

しかし、そのような眼は「力弱く敗れてしまった」[開高 1966:72]。「私」は“眼”のもたらすものの浸透と腐蝕を待ちうけて快よい空白の硬着がおとずれるのをひそかに期していたのだが、ついに何も起らなかった。[開高 1966:72] のだという。

「私」は記者という立場で8ヶ月前には戦場にいた。そこで眼にしたものの記憶を辿ることは、同時に彼が戦争を取材した理由を「発見」するために必要なものであるかのようだ。「私」が、自身の眼がボウヤアを「殺したがっている」と意識するとき、東京にはない、戦場の生と死の光景が一瞬あらわれたからである。戦場をはなれ、対照的ともいえる「清潔」で「明るい」日本国内の病院にいる「私」は、陰惨な戦場の記憶、感触を取り戻そうとしているのだろう。

アジア圏内にありながらも、清潔で明るい、戦場から遠い東京にいる「私」にとって、「残酷で下劣、無残」に殺された人びとがいる戦場での陰惨な記憶は、「私」とベトナムをつなぐためのものなのだった。しかし、東京にあって戦場ではない日常に生きている「私」にとって、凄惨な、手触りのある記憶を辿ることすらできない。戦場を取材した「私」でさえも、日常によって忘却され、もはやありふれたニュースのひとつとしてベトナムは遠ざかっていたのだ。

4：戦取材の理由

この当時のベトナムではさまざまな情報が錯綜していたことは、開高自身はもとより、同時期にベトナムを取材した記者によってもたびたび言及されている。「岸辺の祭り」では「久瀬」が田中にベトナムでの情報収集源を語る場所がある。そこでは、

「どこまでほんとの話なんです？」

「一中略—新聞の論説欄を読んだって何もわからないが三面記事を読んだらその国のことがちょっとはのみこめる。ジャーナリストになりたければ自転車のパンク直しなどは理想的な職業だよ。えらい人の論文なんか読むな。あんな物は新聞や雑誌の白いスペースを埋めるための砂利だ」
[開高 1967: 26]

と、「久瀬」は語っている。

作者の開高は、1968年のベトナム取材のちに発表した「十字架と三面記事」⁽⁴⁾において、同様に三面記事を読むことについて「これが異国を理解するのに、ほかのどんな手段よりも一歩たしかかな方法だと私は思っている。私は旅をすればするだけ、異国人と接すれば接するだけ、最近、いよいよ異国は理解できるものではないと感じだしているが、理解するためにというよりは好きだからという理由でこうしたことをする。」[開高 1969: 137] とのべている。

その国のことが分かる、というときのその国、とは、論説や論文で取り扱われる国家間、政治の上での問題ではなく、そこに生きる人びとの営みがわかる、ということに他ならないだろう。「久瀬」をして、作者の取材の際の視点をうかがい知ることができる。しかし、「理解できるものではない」としていることからわかるよ

うに、そこには作者の第三者としての立場が明確に述べられているといえる。

たとえば、「岸辺の祭り」の描写にも、『ベトナム戦記』『輝ける闇』でものべられた、戦死者たちの記述などにこの立場があらわれている。政府軍と米軍への従軍取材の際に、「フロリダに帰る」においても主人公が逡巡した「死」について、「久瀬」も考える。南の兵士が死に、野営地に運ばれてきた兵たちの遺体についての記憶から、「死」に対して自らがどのように感じたかをふりかえるのだ。これまでの取材でもたびたび目撃してきた「死」は、慣れることができず、残酷だと感じられるものだという。

今日もあれを残酷と感じた。そのことに彼がいまだにこの国の戦争について双方いずれの当事者でもなくしていることを知らされた。弁解も憎悪も起らなかった。残忍が残忍のまま殺到してきた。
[開高 1967: 30]

一見すると残酷、残忍であると感じるのは、当事者でも同じではないかという疑問が生じるだろう。しかし当事者には、第二章でみたように、正義や民族独立といった、戦争の目的が少なくともある。だが「久瀬」にはそれがないという。つづけて、

《民族独立のため》というつぶやきも《民主主義防衛のため》というつぶやきも起らなかった。いずれの言葉も彼には広大で稀薄すぎ、甘い、ねっとりした屍臭はさらにきつく、熱かった。《命令だから》も《殺されないために殺した》も、あらわれなかった。いっさいの戒律が流失してしまっている。安全弁の何もないパイプへふいに水が充滿したのである。[開高 1967: 30]

「久瀬」は自身の立場を「闘牛の死を観客席

から見おろしている人」[開高 1967: 30]だと表現している。そして、「《わかる》と口にした瞬間にどれほどのものが指のあいだから洩れおちていくことか。むしろそれはこの人を侮辱することにもなりかねない」[開高 1967: 30]ともいう。

帰国後の開高も参加したベ平連で、同時期に活動していた久野収は、開高が「アメリカのやり口はとてつひどいが、ベトコンのやり口もひどい。ほくは、そのさまを見て、ニヒリズムになった。」[久野 1995: 91]、このためベ平連を降りたいと漏らした、という。ベトナムを見たために受けた心傷のためかニヒリスティックになり、それらを忘れるために酒や魚釣りに没頭した、とし、「ベトナムに実際に行き、見たという経験が、彼に絶望をもたらした」[久野 1995: 92]のだとする。また、この久野へのインタビューの聞き手であった高畠道敏は、久野の発言をうけて、開高が「政治というものの自体に絶望したのだと思います」[久野 1995: 92]としている。

「久瀬」が死を目撃しても慣れることがなく、残忍さが思想、大義によって克服されることなく、そのまま「久瀬」をおそう。これは同時に、作者の視点の表れでもあろう。正義も民族独立も壮大、広大な、戦争を遂行するための大義としてあるが、「久瀬」にはない。人びとが死んでゆく様子、遺体となった光景が、なぜそうならなければ、なぜ死ななければならなかったかということが問題とされているのだ。政府軍の兵の遺体を目撃したあと、今度は「久瀬」が解放戦線の少年の遺体を見て、遺体が船につまれ、川を流れていくさまを見ていた時、「何のためだ。何のためだ?」[開高 1967: 48]と「久瀬」

は思わず将校に声をかけるほどであったことからわかるように、である。

以上見てきたように、三作品は、一人の記者がどのようにベトナムの戦場をみて、どういった立場でみたか、を描いたものであった。村上兵衛は、1968年の『輝ける闇』における米兵について「前線には、たたかうために太平洋を超えてやってきたアメリカの軍人たちがいる。—中略—自分をここに派遣した祖国の目的の正しさを信じ、ときに疑う。しかし、いずれにせよ彼はたたかうのである。」[村上 1972: 366]とのべている。アメリカ兵も、政府軍も、解放戦線の少年達たちも、それぞれ理由があり戦争に参加している。

対して、三作品の主人公たちは、たとえば「兵士の報酬」の「私」のように、「アジアの戦場を見とどけたい」というもっともな大義も虚構にすぎず、そのために取材することすら信じられない。何のために戦場を取材し、見るか、という理由がない。主人公たちには、ただそこにおいて、戦場を見た、という事実だけが残っているように読める。

高畠がいうように、政治に絶望し、加えて戦争の目的すら理解できるものではなく、そこにいる主人公たちの見たものが記憶として残る。しかし、「フロリダに帰る」の「私」について考察したように、戦場を見た「私」は戦場の凄惨さを思い出そうとする眼そのものにも驚愕している。村上は、「当事者もまた、血を流しながら、かつ真剣な傍観者たらざるを得ないところに、現代の戦争の悲劇がある、といえるのではないだろうか。」[村上 1972: 366]という。

ベトナム戦争の当事者ではない三作品の主人

公たちは、「アジアの戦場を見とどけたい」という大義さえもうたがいつつ、戦場を取材した。そこには、見たひと、こと、ものとその印象が列挙されている。加えて、見る自分自身について自問自答をくりかえす姿も描かれる。このような、自身へのうたが、感情のゆらぎさえも「真剣」に、真摯に記述せざるをえなかった作者の、ベトナム戦争取材の影響を読みとることができるだろう。

5：「戦争取材」の体験

開高はのちに「戦争体験と作家」のなかで以下のように述べている。

二人の親友が戦場で並んで撃たれたとしよう。二人は顔を埋めようとして鼻で土を夢中になって掘る。しかし、もし二人が一メートルか二メートルはなれていたら、ただそれだけで、戦闘後に体験を語りあうとき、彼らはどうしても理解しあえないあるものを挿入されてしまったことに気がつくだろうと思われる。そのひそやかな、しかし濃すぎる焦燥は、それまでの二人のどれほど親密な交渉、友情にもかかわらず、二人を深奥などこかでついに分離してしまう何かを生み出すのである。戦場で結ばれる友情こそ真の友情であるというスローガンがあるが、たしかにそうであるとしても死の体感はどこかで二人を切断し、独立させてしまい、チガウ、チガウ、ソウデハナイと、永遠につぶやきつづけさせる何かをあたえられ、爪たてられてしまうのである。[開高 1970: 3]

もちろん開高はベトナム戦争を取材したのであり、戦闘員として戦争に参加したのではない。ひとくくり「戦争体験」といってもそこには戦闘員と非戦闘員というちがいがあることから、経験の詳細については相違があることは明白である。

しかし、少なくとも彼の意識としては、米兵

も政府軍兵士も「一緒に暮らした」人びとなのであり、解放戦線の襲撃にさらされたとき、特派員としてであっても、その現場に共にいたものであったということもまた、明白であろう。

この「一メートルか二メートル」という距離は、空間だけではなく心理的な距離をも意味するだろう。死の体感があるものとそうでないものを隔ててしまう。それは戦争前の関係性を変容させるだけではなく、戦地における従軍者の間にも分離をもたらす。

戦場の友情は一枚岩ではなく、内情は個別、断片的であり、互いの理解を越えたものが何かしら傷痕のようになって残る。戦争は自国、自民族、理念、イデオロギーといったものへ、賛成か反対を問わず、人びとを飲み込んでしまう。

「戦争体験と作家」で開高はつづけて、

いっさいの戦争は人を何らかの共同体への融合の感覚におぼれさせるために遂行されるが、他のどんな手段をもってしても生みだすことのできない深刻な原理の体現にもかかわらず、もうひとつ別種の原理も同時にはたらき、人はあくまでも自身の感応の記憶に基づいて分離、独立、拒絶をひそやかに、しかし手のつけようもなく深く体感してしまうのである。戦争ほど人を連帯感覚に赴かせつつ同時に徹底的に人を個別化し、独立させてしまうものは、ないのである。その執拗さは他のどんな体験にも類を見ない。[開高 1970: 3-4]

と述べている。

戦友同士が共通理解できないものがあるということは、互いの認識はやはり異なるのだという意識が生じ、時として違和感が極みに達すると拒絶反応をも生じさせることになるだろう。個人レベルでは孤立、拒絶という相反する側面があらわれる。

他方、戦争は共同体への融合を求めて行われ、

融合、統合が目的としてある。経験の違いによって隔てられた従軍者間の隔たりは、共同体への融合という戦争の目的では補填できるものとして機能しない。むしろまったく別の問題として、国家や共同体には融合をしようとうごくということだ。だが開高は、政治や国家は信用できず、高島の言では「絶望した」ことは先述したとおりである。

個別化に関しては、戦争、戦死者たちが、主人公たちに「爪たて」たのであれば、たとえば「岸辺の祭り」における田中少年が解放戦線の少年たちの遺体を見て、人間として成長したということは重要であろう。また、それを描くことによって、現場で戦場を見ることがいかに一人の人間に影響を与えるかを伝えることもまた、重要である。

だがそのような経験を伝えるには、若い田中少年でなければならなかったのだろうか。先述したように、おそらく田中少年よりも10歳以上年長であろう「久瀬」も、いつまでたっても「死」に慣れることはできない、とっているからである。彼自身も「死」に影響され、慣れることはできず〔開高 1967: 30〕、立ちすくむしかなかった。したがって、田中少年の描写は、「久瀬」の「死」に対する思考の描写と比較すると精彩を欠いているようにも読める。

ただ、田中少年が少年から「一人の男」に成長したのを描くことによって、第三者という立場ゆえに、戦場の凄惨さを、他者の死を目撃することが、生き残った者を成長させてしまうという、戦争を取材したもののみが持ちうる、言いやうのない残酷さと凌辱感を強調しえた、とはいえるだろう。そこには戦争取材をした者の傍観者的な立場が述べられ、『輝ける闇』で「私」

が少年の公開処刑を目撃した際に自身を表現した「私は視姦したのだ」〔開高 1968: 167〕という言葉につながるものがあるだろう。

おわりに

以上見てきたように、開高はベトナム戦争に関連する作品として、二つの代表作品の間、短編として体験や見聞を発表している。しかしひとつひとつの作品は短編としても非常に短い作品である。語りつくせぬひと、こと、ものを短く、まとめず、描き発表するという、定期的に連載される記事のような、いわばルポルタージュ的な手法であるともいえる。

作品の形式としては、作者が経験した戦場が背景にある。しかしルポルタージュであれば、取材する者自身の印象を書くのみでは成立しえないだろう。よってルポルタージュともいいきれず、主人公たちの見たまま、感じたままを記述するものとなっている。「眼の鋭い」うちに短編を発表したが、作品として熟成させるまでには時間を要している。

「闇三部作」の最終作品である『花終る闇』について、ベ平連で開高とともに初期から活動していた小田実は、「たとえば、『花終る闇』。あれは小説の残骸のような作品だった。たぶんみごとな小説の残骸。」〔小田 1991: 199〕としている。開高自身、ベ平連活動中にも、『輝ける闇』でも発言しているが、断片に「体をゆだねること」を好んでいる〔開高 1965-b:101〕。作者開高の戦争取材の体験は、このときまだ素材として提示されたにとどまり、人物、戦場のリアリティは十全にあるものの、「ルポ的」であるともいえるだろう。

先に述べた「戦争体験と作家」でも述べら

れているように、開高にとって戦争は「徹底的に人を個別化し、独立させてしまう」[開高 1970: 4] ものだった。

敗戦後に青年期をむかえた日本の作家としては稀有な経験をしたにもかかわらず、また米兵、政府軍と、同じ戦場でともに暮らしたにもかかわらず、開高は離脱できてしまうのだ。開高が本稿で取り上げた作品で主人公たちに語らせたのは、非当事者としての戦争であった。立場の相違という、埋められぬ一、二メートルの実感から得られたものでもある、といえる。

ベトナム戦争に関心のない、まったく関係性もない非当事者であれば、「兵士の報酬」の考察のように、忘却し、他国の戦争における凄惨なニュースに慣れ、何も語らず何も思考せず、悔恨することなく、苦悶することもないだろう。「岸辺の祭り」の「久瀬」のように「ちょっぴり深入りした観光客」[開高 1967: 30] と自嘲しつつも、先述の村上の指摘のように、非当事者でありながら現場を「真剣に」見て、ベトナム戦争に「爪たてられ」た開高の思考の道程が描かれているのだ。

1972年に発表された『夏の闇』の主人公「私」は、「日本人の戦争であってほしかった」[開高 1972: 222] という。また、東と西が壁で隔てられていれば、「私」は壁の上に立ちつ。この立場は、東と西どちらにも批判されるが、それでも「私」は、「壁の上にいる人間でなければつかめない現実というものもあるはずじゃないか」[開高 1972: 204] ともいう。結局のところ、どちらにもつかず、どちらが正しいのかもわからず、とにかく私はそうする、という発言といえる。

だが、東と西、右も左も階級も民族も、信用

ならず、立場、帰属するところを放棄しているわけではないが、「どこかにも立たないという立場」は、どちらか、あちら側かこちら側に立とうとする基盤の脆弱さ、あやうさを問おうとしている。こうした既成の思想、信条を疑いつづける姿勢は、「兵士の報酬」、「フロリダに帰る」、「岸辺の祭り」にも明確にあらわれているのだ。

本稿でとりあげた三作品は、問題の内面化を待たず、素材の提示にとどまるだけに終わるかもしれないという危険を回避せず、“実験的に”言語化した作品ともいえるのではないだろうか。

なお、開高が帰国後1965年4月に発表した『ベトナム戦記』では、小説ではなくルポルタージュであることもあろうが、掃討作戦から生還したのちの開高自身についての描写はない。また、1968年の小説『輝ける闇』では掃討作戦の終了で作品が終わっている。したがって、発表時期は前後するものの、本作は掃討作戦の後日談としての位置付けができる。

また、『ベトナム戦記』および『輝ける闇』では、解放戦線少年の公開銃殺が描かれている。目撃したのちの開高と「私」は、時間の経過によって目撃したときの衝撃がうすれてゆく。本作においても、掃討作戦の翌日と二日目という時間の経過によって、衝撃に慣らされてゆく様子が描かれている。

さらに、「フロリダに帰る」においてはボウヤを「殺したがっている」眼に驚愕した「私」であったが、『ベトナム戦記』ではベトナム戦争の現場を「見てきた」ことを強調している。また、後年の『輝ける闇』では「見ることはその物になることだ」[開高 1968: 225] としてい

る。見る眼そのものではなく、「見た」ひと、こと、ものが重視されている。

詳細な検討は本稿では行わないが、以上二点の代表作との類似点、一点の変容を指摘しておく。

〔投稿受理日2017.4.22／掲載決定日2017.7.6〕

注

- (1) 開高健の経歴、書誌については、和泉書院刊の浦西和彦（1990）『開高健書誌』を参照した。
- (2) なお開高は、『輝ける闇』の発表前に、ベトナム戦争を題材とした長編フィクション「渚から来るもの」を1966年から『朝日ジャーナル』に連載していたが、この作品は単行本として出版されることなく、19年後の1984年ようやく刊行された。
- (3) 三作の引用は初出誌からとした。なお引用中の旧字体は新字体にあらためた。
- (4) 「十字架と三面記事」をふくむ、1968年から1973年までのベトナムに関するポルタージュをまとめた作品として、1973年に『サイゴンの十字架』が文藝春秋社より刊行された。本稿では「十字架と三面記事」の引用にあたって、初出誌である『文藝春秋』第47巻2号を参照した。

参考文献

- 浦西和彦（1990）『開高健書誌』和泉書院
- 小田実（1991）「『その後』の「戦争文学」—野間宏の場合—」『群像』講談社、第46巻7号
- 開高健（1965-a）「兵士の報酬」『新潮』新潮社、第62巻7号
- 開高健（1965-b）「東京からの忠告…わが「ベ平連」アピールに力を…」『朝日ジャーナル』1965年9月19日号
- 開高健（1966）「フロリダに帰る」『文藝』河出書房新社、第5巻1号
- 開高健（1967）「岸辺の祭り」『文學界』文芸春秋社、第21巻9号
- 開高健（1968）『輝ける闇』新潮社
- 開高健（1969）「十字架と三面記事」『文藝春秋』第47巻2号
- 開高健（1970）「戦争体験と作家」『新潮世界文学』44ヘミングウェイⅡ』月報24、新潮社 第44巻

月報24

- 開高健（1972）『夏の闇』新潮社
- 開高健（1974）「頁の背後11」『開高健全作品 エッセイ1』新潮社
- 久野収（1995）「連載 戦後半世紀への証言 第Ⅴ部 市民として哲学者として 第17回 ベ平連運動(2) ぼくにとってデモは実に楽しかった」『エコノミスト』毎日新聞社
- 村上兵衛（1972）「解説 開高健『輝ける闇』」『戦争文学全集 第六巻』毎日新聞社
- 吉川勇一（2007）「〈インタビュー〉ベ平連の経験と共同行動の論理—開高健問題から反改憲運動まで【聞き手】天野恵一／水島たかし」『季刊 運動〈経験〉』No.23